



瓶
西
日
記

卷之五

۲۷

5



記卷之五

靄山樵者 同錄

佐野常民
圖書之記

慶應三丁卯年七月六日 西洋一千八百六十晴無事

同七日 西洋八曇無事

同八日 西洋八曇。朝十時博覽會掛ドナ来る

同九日 西洋八晴。無事

同十日 西洋八晴。荷蘭學生本邦人并ニ荷蘭人ボ

ウトエレ到着モ

同十一日 西洋八晴。此日巡國役行弁ニ留守の人



代佛
誕帝
辰初

を定めらる

同十二日西洋八月晴無事

同十三日西洋八月晴無事

同十四日西洋八月晴條約濟の各國公使館へ引

合の事なり

同十五日西洋八月晴午時各國公使館へ尋問の

使者出る。此夜佛帝初代那破烈翁誕辰の前宵す

つき市街燈光盛にて人群をなに

此日々先帝誕辰の當日より佛國中の大祭日

なり。四民各其職業を廢し。美服盛飾にて遊息

一。或々知音を往来し。終日羣衆にて歡を盡す。
夜又入へ王城の前面より。アルクデトリヨン
フまで両縁の市街に瓦斯燈。又ハ小提燈など
多く点一路傍よ沿ふ。瓦斯燈を更ニ其數を増
し。五色の玻璃を以て。火色を彩り。恰も白晝の
如し。又毎歳の恒例として。其餘各所ニ細工火の
舉なり。就中アルクデトリヨンフの觀火を最
第一とぞ。夜九時頃より始め。第二時過よ至る。
青紅紫白金色銀色の火光絶間なく。空中を駆
滇し。尤壯觀なり。市街又ハ。滿都の人士長物と

あく。往来縱観して殆ど立錫の地なきよ至る。
各戸の階上より其知音を集ひ。盛宴を開き樓
より倚て。看ものえど多い。夕方より馬車通行を
過む。益行人多く一過ちあらんとを恐てな
り。大概曉より徹て止む。此夜フロリーハルト
其宅又招待せるよ陪を

同十六日西洋十五日西洋八月晴。午前十一時。荷蘭新公使ツ
イレンデンヘル来る。

同十七日西洋十六日西洋八月小雨。無事

同十八日西洋十七日西洋八月晴。午後二時コロ子ルを尋問

せらる。フロリーハルトクレイ来る。シイホルト。
其國許より至る。○英國ミニストル來り。来廿二
日英國へ巡覽の事を言ひ遣ハシケ。女王其
別業へ參られ。外國事務大臣よも陪從せし。因
て。一だらく猶豫あらんとを請ふ。尤々これか為よ
各國へも巡回せられざらむ。王よも本意な々
き。各國巡歷済させうき。内端略礼にて招待い
き一度由を申越せり。

同十九日西洋十八日西洋八月晴。無事

同二十日西洋十九日西洋八月晴。タシイボルト英國へ發を

るより來り告別を

同廿一日西洋八月晴無事

同廿二日西洋八月晴。此日荷蘭公使へ問合の事あり

同廿三日西洋八月晴。無事

同廿四日西洋八月晴。無事

同廿五日西洋八月晴。此日英國ニ留學セラ。生徒來候セリ

同廿六日西洋八月晴。生徒英國ヘクヘリム

同廿八日西洋八月晴。夜雷雨。此日語學教師來り。

スロリヘラルト。來候モ
同廿九日西洋八月晴。朝より各語學を始む。レーボルト。英國より歸り來候モ

八月朔日西洋八月晴。此日。本邦より書信至る

同二日三十日。西洋八月晴。遽急の事。山外三人歸國を命ぜら。本草學生某も事充て。共よ。へらト。ム。佛都博覽會の舉也。稍事充て。各國の帝王も追々。本國より歸り。がば。我公使ハ。兼て期。へら。る如く。各國を巡迴せんと。エリス。ヨ在留せる。瑞ス。オ。ホ。イセ。ホ。ンタ。白。キイ。意。リヤ。蘭。

初回
途歴

ホルト公使へも打合の使者と出。各國便宜より
ガル。路次の都合を謀り。先瑞西國より回歴せんと
おもひ立きべり。

同三日西洋九月一日晴。フロリーハルト來り。巡國の跋
転期を伺ふ。近日より巡歴出転の期を定めらる。
此日人々博覽會を又覽るよ陪を。午後三時帰る。
夫より靄山ハアベシユーデモンタンクへ行て。
卯三瑞穂等より会。ガリレーヨ至り。同僚等とも告
別尾。

同五日西洋九月二日晴。明日ハ巡國出転として。各旅装繁

忙なるよ。御國の使者此地へ至るよ。蘇士ヨリ
電線の知せり。八月六日西洋九月三日晴。各陪役の人々旅装も整ぬれ
ハ朝六時汽車にて。佛都を發。午前十一時半リ
ロワといふ所にて午飮。

此トロワ。佛國九十有余郡中の一なるシヤ
ンパンギュといふ部郡内の一村落なり。シヤ
ンパンギュ郡ハ葡萄名産の地にて。醇酒釀造
の家居も多く就中シャンハン酒を第一とす。
蓋其郡名を其儘酒名と用ゆるまらん。此日

午餐又一嚼を試し一よ。果一にて。他の産又優と
と數等よりて。其名空一から也。

瑞西

夕ハ時。瑞西國バルといふ所又抵り。三王とい

へる客舎又宿りぬ

此旅舎有名のランヌといふ大河又臨みて。河水欄下を侵し。夜景殊々清く暑熱を滲き。聊旅

疲を慰せり

輒時かりて。此地の鎮台來訪せり

同七日西洋九月四日晴。朝八時鎮台の鄉導又て說法所

并織物細工所等を見る又陪走

藏物所

此織物細工所ハ格別廣大ならざれとも都て婦人の首飾又ハ頭上覆面等又用ゆる極て緻密なる絹紗など製毛所なり又別々麻を紡績して織物を製毛。恰も本邦五仙平の如く一にて更ニ精巧なり

午後一時半。國都ベルンへ抵り。ベルン子ルホフと云旅舎へ宿ぬ。大統領の令より因て士官來候せり。同八日西洋九月五日雨。此地四方窓多にて。常々雲霧掩蓋。每朝日出三竿の後漸消散もと云。此日ハ大統領西謁の事兼て打合りにて。午時十一時迎の車駕

瑞西
伯爾尼

四輪。客舎より来る。一行礼服にて陪從し。本地の議政堂へ赴て。謁見の式あり。大統領副統領。其他の貴官打拂みて面謁。互に両國懇親の祝詞を述べ。式畢て後大統領の居宅を訊問を。夕五時大統領より。樂師八十人許。客舎へ帰りて樂を奏せり。此樂調。陸軍行進の節。用ゆるものよりて。舞踏歌曲なども用ゆるものと異り。最勇壯よりて。頗る古雅なるを覺ふ。都下の士民。異邦の人を見。奏樂を聞むとて。客舎前より群集せり。

ツーン

同九日西洋九月六日晴。朝五時半。軍事總督の鄉導より

ツーンといふベールより十里余隔たる所にて點火調兵を觀る。陪せり。調練の人数。歩兵四レジメントトセントレジメン七百人余。大砲二坐。一坐。騎兵二中隊。中隊三十六騎トシシク。兵二中隊。中隊六人許。整頓行軍の駆引より。攻擊オタク、籠討カニラウの舉動なり。其指揮周旋。綿密ヨリて尤自在なり。

此調兵。都て農兵よて。僅一个月程の調練よりて整へりといふ。國內の調兵の法は。農々取りて。農時を妨げぞ。其約を緩めて。其能を盡さしむるを。政体の要とす。故に小國といへとも。

舉國二十萬の臨時護國兵なり。其法簡易。輕便
にて少しく肅整を欠く雖ども。其勇敢なる却
て他の月替日課の兵より優るといふ。

調兵畢りて好景樓といへる客舎へ導かれて
饗應せり。官十三人許出て。侍食を午後。舟にて湖
回。此地有名の豪富バロン某の居宅を見る。居
宅、ツイン湖の濱より樓上湖水を臨み。湖の周圍水
頻にて。建築せり。湖上湖水を臨み。湖の周圍水
碧砂白四圍山巒蒼くとれて黛眉を列。ヨング
フロウといふ。山ヨングフロウとハ。ホ通女。義
のいま登り得ざ。白雲高く聳け。積雪不斷り
意をいふとぞ。白雲高く聳け。積雪不斷り

て。銀の塔。天際よ突立。其直徑一里餘もゐ
へく。我邦の富士よりも少く優りて高からむと
思ふ。諸山。被違よ連り。恰も縁児の白頭翁を慕
ふ。似たり。瑞西中の最佳勝なりといふ。宅の主
人杖よりて。老病を扶け迎送をなして敬礼を
盡せり。頗る非凡の體相。而て最殊勝。見ゆ。帰
路又立寄り茶など齧し。猶縹囊。至り。大砲。町打
地雷火の試業等を見る。夕五時。汽車にて帰る
同十日。西洋九晴。午後一時。マルクの武器藏より
大砲。小銃。其外数多の。兵器の新發明精巧なる

蓄熊

ものを見る。軍務畢相始終郷導一。荷蘭ユンシユ
ルセ子ラールも來り陪せり。夫より飼熊を看
此地古來よりの風習にて。熊を畏る戸々其形
を作りて。邪氣を避る符とす。都府の西北より大
なる園を作り。二つの大熊を養畜す。往来の人
餌を与ふる。又パン果子の外を禁す。千八百六
十一年三月三日夜。英國の甲必丹一人過て。其
園中より陥り此熊と鬪ひ一死。終る熊の為より裂
きたりといふ。此地ベルンといふ。獨逸語

よて。熊のとなりとぞ
夕五時帰て。旅舎の向かなる山の晚景を見んと
て人へ陪して。行ひ險を攀凡。十五町杵よして。巔
よ達也。時よ落暉なを諸峯よ駆り。ベルン街衢も。
眼下よ簇り。人馬の行通ふ様なと風情なり。少焉
して月出て烟霏搖曳し。眺望最佳なり。同七時半
下り帰る

同十一日 西洋九月八日 晴。此日士官の郷導にて。此國有名の時計を製造せる。日内尾といふ所。抵り。其表を見。人に多く陪し。午前十時汽車よて。湖の

許なるベイトイといえり市街は抵り汽船は乘り午後三時出帆也此湖ラアツクデシユ子イブと云長十里余幅二三里水波渺茫とて蒼海は異なりを周圍ハ群山繞環して處々村落も見ヘ瀑布泉など數條を懸り。恰も園丁の意匠は出るゝ如し。湖上瑞西第一の高山モンブラン白山といふ意なりを望む白雪堆く夕陽は映し尤壯觀なり允八九里よりて夕七時頃ジユ子イブへ抵りメイトロボールといふ客舎は宿る

ホーリ

此地ハ湖の西南より傍ひて頗る繁盛の地なり。湖の末流衝衝を中心ノ廣大の鉄橋を架し往来自由ならしむ其側又小島なりて樹々蔚然として納涼は宜しく總て家居富饒人品も華うらば。慶くよ時辰機製造所也。時計ハ歐洲第一ヨリテ瑞西人自称して小巴里と云ヒぞ本日の大統領も所用ひりて此地に來り且伊太里國の故ゼヨラールガルバルジ。嘗て羅馬帝を廢し宗門闘鬪の故習を除き全歐洲をして共和国の政事たゞむるの議を主張。此時同志糾合

中先此國より來り。同盟を催促せとて。此日到着せ
リ。クバ。闕街景混雜せり。

同十二日 西洋九月九日 晴。午前十時より。時辰機製造所
を見る。ヨ陪レ。夫より金工所等を見る。此地の富
豪ハロンロウチユルといふ者來りて。招待セ
んと乞ふ。夕五時陪從也。家宅本地より二里許
く。寄跡古雅の器
物多く畜へり。

同十三日 西洋九月十日 雨。今日ミベルンへ歸ることて。朝
六時。滌車にて發。午前十一時半ヌーシヤテル
トイ。小市街は抵る。此地ハ電線工夫の根本よ

て。近來稍新發明の字面掲出レの工夫出来せ
ヨ。故ニニストル郷導にて是を見る。イクノ
ハ精妙奇巧。言語の及ハざる所なり。夫より鳥獸
の真形。數多集置所的打銃砲。稽古場。天文臺。觀月
樓などを見て。夕六時。滌車は乘。夜九時。ベルンへ
帰る。此夜靄山御國の使者附屬等を導き。公使は
公用よりて。此地より到着して。モキノ。公書を
出一もさくの物。其他各家書などもて届来る。且
議モベキ公事多々れバ。深夜まで打寄相語へり
同十四日 西洋九月十一日 霽朝。白耳義國より使者來リ

九月廿五日より同廿八日まで。奉國の祭日より。其節來訪りりときよ。招待書を出せり。同十五日西洋九月晴。明日に當地を發し。荷蘭國巡回の積なれ。大統領へも達し。此地より在留の。其公使へも其由を書遣し。夫々従行の人々引分き。半ハ従行し。半ハ佛都より帰るとを取宂トヨシタツ。午後一時、鬻山外三人へ急遽の公事より出立を。夕六時大統領より夜餐の。バリスへ向カムき出立を。夕六時大統領より夜餐の招請ありて一同陪従を。

同十六日西洋九月十三日晴午後一時半。荷蘭へ出立を。

佛都巴里へ帰るへき人夕五時再びハアルへ抵り。人より半時前出立を。夕五時半。バアデン國タルトロワロワの客舎にて夜餐し。夜九時又炕車より徹曉を。

同十七日西洋九月十四日晴。朝六時半。バアデン國タルムスタートといふ所にて小憩し。午前九時。マイヤンスより抵り。ランヌ河の涯より炕車より宿す。又より抵り。金星エンドラードといふ客舎より宿す。

同十八日西洋九月十五日晴。朝六時炕車より發し。午後一時ランヌ河を濟る。河幅廣く水深くして。荆時

時洪水の患ひれり。橋梁の架をべき術なく。巨船を泛め。轍軌を通し。蒸車來きハ。轍道は載せも。一
ら一免平地。子ひて。一くさら小滯碍。ならしむ。午後一時。荷蘭國界セイヘナールへ抵る。荷蘭より迎と。リユートナントヨロ子ルフワソノカツペルレン。及御國の留學生等出むり。夫よりウエットレフトへ抵り。同二時半。ロツトルダムへ至り。馬車よ移りて。直よ市街を巡覽ありて。同三時半。散走。

此ロツトルダム。マアスといふ河よ添ふる。

一都府にて頗る繁花之地なり。蒸氣。帆前船とも多く碇泊し。總て荷蘭内地へ来舶見る人の上陸せる所なり。砲台警衛の軍艦も多く備へきり

同四時。國都ハアへ抵り。蒸車場生て國王より。迎の馬車三輶と。粧ひ側役バロンヌーケルトテシヤウベルといふ者出迎ひて。ホテル好景樓といふへ。請一ぬ。此日到着を。見んと。土少鳥ありて。ユロ子ルとも来りて。安着を祝せり。巴里へ電線を。到着を通し。留學生等も来祝を

同十九日 西洋九月 曼朝。議事堂より。國の大臣の集會あるより見物のベーとて並て國王より招待ひりて。午十二時迎の馬車来る。各礼服にて出らる。礼式掛も出迎ひて。堂中絨敷様の所より請き。午後一時。國王及貴官の大臣等。各馬車にて來り。途中ハ。歩兵隊にて警衛。王車の前後ハ騎兵九四小隊一小隊十二騎三より囲ミ。王車ハ八馬。每馬御者二人宛。衣服馬車の粧ひ殊々美麗を盡せり。王車より従ひ聯行せるものハ。二馬より駕せり。車三輪六馬より駕せり。車三輪。王車共七輪なり。

國王議事堂より著し中央の小高き所より座を設け。貴官及諸民の扈從なるもの其前と左右より羅列し。即國王着座にて。懷中より一小冊を出して高聲より是を讀む。其趣旨ハ先其年の無事百姓の安寧を祝し。それより政治可否得失。允審理。財賦吏胥の曲直其他万般の事を下問せらる。よて毎年恒例なりといふ。式畢りて國王歸去せり。當方も續て帰去を其途中市外田園なとを遊覽一夕四時帰宿を

同廿日 西洋九月 曼晚晴。午時。銳砲製造所、歩兵屯

所等を見ゆよ陪を。夕五時國王謁見の式ゆる。より迎の車駕二輶來。一輶ハ國王の衆車にて。四御者四人其二人ハ駕先駕の騎兵二騎礼服各同様のセリ馬よ乗て御せり。先駕の騎兵二騎礼服又ミテ美麗少焉。叢従のユロ子ル來りて。鄉導。従行都て六人。夕五時半。王宮入。國王へ謁見ノ兩國懇親の祝詞を述られ。國王も厚く来意を答謝。禮畢て太子の別宮と抵り。夫より。フランスフレデリイといふ國王の弟の郎を訊問セラる。帰舎の後此地市中懇代ヨンノヘールフルステーイトイふ者來り安着を賀を。英國より在

留せる理事官來り候モ。巴里留守館のものより。書簡をもて安着を賀モ。

同廿一日 西洋九月晴。西北の港ニユーヨシツア

といふ所にて。軍艦製造所等を見るよ陪は。ユロ子ル卿導。朝七時より。煩車まで午時同所又達に。水師提督并附屬士官數人禮服にて出迎ひ。許多の兵卒を出一警衛セリ。尤般勤鄭重なり。途上兵隊ハ。捧銃の礼をなし。樂手ハ奏樂して。祝セリ。先客舍よ請一轎。く憩息り。港口又碇泊せる。艦中へ請は。時又惣軍艦祝砲せり。水夫ハ皆檣

アムスト
ルダム

折々登らしめ。御國旗を掲げ。艦へ移る毎少祝砲
カリ。フランスアンリイといふ惣銃船。市街
接近なりとて。祝砲なし。軍艦。製造。いつきも宏大
堅牢ヨリて最新奇製多し。看了りて病院を見る
夜十時帰宿モ

同廿二日西洋九月十九日晴。午後二時アムストルダム
リ一及アレキサンドル客舎より賀モ。魯國在
留ミニストルロウトルダムレドクトルキルレ
入等來候モ

同廿三日西洋九月二十日晴。朝八時。アムストルダム府

を見るよ陪モ

アムストルダム。荷蘭の別都にてハアヘヨ
ク市街も廣く且繁花なり。河海舟楫の便宜
く。川筋多く市街を切断。處々より大橋を架シ。
中より高橋を左右より旋回。又ハ上下する仕
掛けるもの多い。蓋通船帆檣の碍りなきら
むなり。地勢ホーリー本邦大坂に似たり。高佑銀行
なども大なる所よりて貿易繁盛なり
同十時先来丁といふ所にて。蒸氣もて水を汲上
る器械ポンプを見ゆ。是ハ同所よりある。巨大の汎
用ゆる

ト
元
ク
夫 よ り。ア ハ ス ト ル ダ ム チ へ 抵 り ジ ャ マ ン
金 剛 製 造 所。造 船 所。及 博 觀 會 所 を 見 る。此 所 の 鎮
石 台。及 水 師 提 肩 等。鄉 導 セ り

此總鎮吉ハ本地至重の任よて高年よしにてす
畠坂群の者ならでハ任よ堪へず。往昔ハ威權。
國王よひとりウケルといふ

シレ
イデ

同廿四日二十一日曇午前十時レイデンといふ所へ出逢せぬ。陪モ。是ハ巡回中情入の書記通弁官レーボルト亡父の別業在るによリシートボルト。其所へ招待セリなり。此父ハ。年來。御國長崎

予在留セ一ものよて。在留中聚めくる。本邦の古
人の書画。古器物珍奇の品など。都て御國様より陳
羅し。且庭前假山池わりて樹卉の植並へも歐風
ならば。殊よ目よ染て人々坐よ感慨を起せり。園
翁綱を擧て魚を渾料理など。懇よ饗り。一
同廿五日西洋九月二十二日午後一時荷蘭國太子の弟ア
ルキサンドルを尋問を。白耳義のシャルシタフ
エールル來候を。

同廿六日西洋九月二十三日曇。此日國王より再懇親の招
待あり。但留別の謁見なり。夕五時迎の馬車来る。

迎送應接甚殷勤鄭重なり。蓋此國ハ各國と異なり。御國と年久しく和親を通し、交易をなし遂に信義を失そは。且千八百年の初佛國那破烈翁より侵撃せらる。國殆んど淪滅。東洋所く屬國とも本國の威權行へきぞ港こよも。其國旗を逮ふを得ざる程なり。一ヶ僅は本邦長崎港のみ。依然國旗を掲るを得ざり。永く是を徳と。常ニ御國の信義を忘却せをといふ。其交誼久しきを経て衰へざる感ひへド。夜八時帰館。側役スヌカール及コロ子ル。其外留學生等へ、夜餐を具を同

夜白月義ミニストル來候也

同廿七日西洋九月二十四日晴。朝八時。已里へ書を寄を同十時國都を発。此日國王漁車を出一て一行の者を乗一め。其國境まで送る側役スヌカールハ漁車場まで附添コロ子ル。コロツトルダムまで留学生等ハ荷臼國境ヨウセンドールまで送れり。輒時の旅況も告別よ至きハ流石は感情起れ。ノ午前十一時半コツトルダムへ抵り漁船ハ移クムル。テーキまでゆき上岸一再び漁車までヨーセンタールへ着く。此處へ白月義國王の漁車

もて。郷導の官員數人來り迎ふ。夕六時、白月義國都ブリツクセルへ着く。纓車會所まで礼式典及甲必丹ニケイズ馬車を備へ迎へぬ。同六時旅館へ就く。所の人々遙々群り冠を脱し礼せり。纓車場へ兵士及軍隊の者多く出でて警衛頗る嚴肅なり。

同廿八日西洋九月二十五日曇朝カビテインニケイズ來り國王謁見の事申入。午後一時、迎の馬車三輪につき也壯嚴の粧ひよて來り迎ふ。第一車へ郷導の甲必丹ニケイズ并陪從の入。第二車へ公使

并傳從其外礼式有レーボルト等。第三車も陪從の人々なり。同二時半謁見畢り謁見の式大槻。荷蘭と同一。尤王妃器など盛々羅列。構裝甚壯嚴なり。歸宿後畧一同十一時帰宿也。

同廿九日西洋九月晴。二十六日朝十時半、陸軍惣督郷導よりて、陸軍學校を見る。陪モ火術場、細工火、烽火、等、都て軍陣又用ゆる火佐舍密術場用薬品又ハ漆工又を修行する場なり。舍密術場用ゆる品を製造すたり等を一覽。夫より、兵隊屯所の拳動歩兵、整頓、壯模たり。

觀火枝

て、旋回。行進の手前。甚整肅なり。又亂軍より彈薙の竭るゝ時、銃鎗を以て接戦、又及ふの拳動杯甚自存なり。又細き鉄砲を持て相撲の技をあわせ覆面小手等へ本邦演擊の具よひとノタキとも等其製甚く疎ぬり相撲の業へ軟弱にて迂闊也。等を観亦園圃なとも遊覽し、夕五時帰宿を。此日此地の大祭日よて、夜八時頃より止郊まで觀火の舉りうて招待せらるゝよ陪を。行程一里半許にて郊野より至れり。國王の移敷を設けて在り。此所へ請ぬ。

此祭祀は往常當國の初代王荷蘭より分割して此國を創建せり。祝日の由。毎歲此所にて烟

請
女

火を擧て興とて其仕方。双方へ竿を立麻綱を張り。一人の曲藝師。羨羅（うら）と装束し。其綱の上を歩に竿の長凡十五間許細の豆り。凡三十間も行るべし。曲藝師手み長き竿を持ち。細の上を緩歩一歩詰り。後面よ跡へ逆走せしむ。兩三度よりて。次第よ疾走翔るとく。或ひ中央綱のたるゝよて。綱よ手を両足を投し。身を翻し。細上よ達立し。又一足を綱よ掛け。身を逆下し。看官を一て、寒心栗股せしむ。其休息中ハ種々の細工火を揚け。空中よ点し。末尾よハ。彼曲藝師の持

一竿頭より火を焚。其人の影へ見えぬ火鎮にて又細上を徐歩。此時下の觀火場より。数千の細工火一時より連焚。青紅紫白の火光。空中より騰騰。尤奇觀を極。

此夜群參の看官人。凡二万人余。細工火の費失一万五千フランク程よりと云。

同晦日西洋九月二十七日晴。朝九時。甲必丹の鄉導より。アシベルスの礮臺を觀る。陪を。午前十時。一の臺場より至る。此臺の築立方。外面に土石より。屈曲長蛇の如く。堤の下に深き溝より水平面より充ち。内

側の入口。兩所は鐵橋を架して通し。砲台の形扇を開き。一とく外面斜横にして。其堤の内側は石と瓦にて。築立て土窟を多く造り。其中より彈薬砲器械を貯へ。兵卒屯所を設け。其扇の要と思ひ。所より。一の宏壯なる礮臺を設。數十門の大砲を備へ。其外面と要と相接る所に深溝より。僅々七八間の土坑を設て。外面と要との往来をも。土坑の両側より。又十門宛の大砲を備す。交戦の時外面の砲墩礮みて相接。万一大利なれど。要領。引纏て防禦せる爲なりと云。其制度宏壯。緻密な

る。一歴にて識得せへり。午後一時アンベル
スへ抵。市街周囲の砲台を見る。尤未成中なるも
ありて築立方等も仔細に見えて極て巧なり。此
國へ周囲陸地より海港なれ。陸戦の設精密
を極め。且此地へ國中第一の要地として緩
急の時へ國民を移し。舉國ニ力を衛る。故ニ周地
砲墩にて圍繞セし。其間より前頭扇形の砲台
を八ヶ所設け。互に犄角の勢をなす。防禦は備
へ。兵糧を常々充實し。國を合せて是を守る。歐洲
擧て攻来るとも容易に敗るへらるをといふ。此

看劇

地到着の節セ子ラール出迎ひ。砲台・巡覽の節ハ
勤務の士官等導いて。總て式礼等嚴整なり
九月朔日西洋九月二十八日晴。朝十時。昨日残一。砲台
等を見る一覽後。アンベルスム。炮車製造所
諸器械及弾丸等製造所を見る

同二日西洋九月二十九日曇。夜七時半。並て設置し。劇を看
るよ陪せり

舞臺の周囲に警衛の兵を出れて固め。舞曲始
き。座頭のもの出て来臨の參を謝し。其接待
周旋。都て國王見物の時と同様なりといふ。其

アシ
ンラ

舞曲。美麗を極め。所住様との仕業より
同三日 西洋九月晴。朝八時。カビティン郷導みて
リエトジといふ地にて。銃砲製造の器械を見る
よ陪せり。午時汽車にてシラアンといふ地より至
り。製鉄所を見る。反射鎔鑛の二爐。鉄材精製の法。
鋼鉄の吹分方。石炭掘取方。石炭も都て地中より
掘取る其深さ凡四百メートル あ諸砲車及蒸氣車鉄軌。其外諸器械の
製造等を見る。此地の總裁其居宅は請し。饗應鄭
重なり。夜十時帰宿を

マリート
ワニエト

程より職人七千五百人より一万人許。凡一年
の製作金高通例三千万フランク許なりとい
ふ。是より先き英人ニツクといふ者此地より來
り製作を始めより次第其業弘むりて今
より至りてハ。歐洲中有名の地となれりと云
同四日 西洋十一月一日晴。朝九時カピーテイレ郷導みて。
汽車よりマリートワニエトといふ所にて。
鏡及硝器等を製造を見よ陪せ。同十一時同
所より至る。車四輛を備へ。製造所の役員十人許出
迎ひ。製造所の頭取ハ其男子を騎兵よりて。近い

せ。郎宅の前より至る頃より三十人許の樂師をつら
ね奏樂を興へ抵着を祝へ。居宅前より其親縁な
る婦女子を差しりて粧ふて出迎へ。め。堂より請
い。午節を饗を此節親縁の者。數人前導へ。給仕等
饗應善美是より製造所へ郷導へ。種々の器械珍
奇を備へて。其業の精巧を見せしめ。歸路の節へ
道路兩側より諸職人立並祝詞を呈。其人員凡て
百人余なるへ。其前より樂を張りて道路を清
く。尚又其家より請い表の方より。二百人余の婦
女の職方。何よりも粧を凝らし。打揃ひて祝詞を述

ふ頭取始より役人七人嵐車にて送り来る
同五日月二日西洋十疊。郷導よりて午後一時繪圖面學
地理學校を見るよ陪を。本國の精細地圖及。歐洲
全圖其外。砲墩。築城等の諸繪圖類を見るよ。其細
密精巧を極め。新奇工夫の至る所。言語の及ふ所
よからぬ。夕幸國レヤルジダフヘールより。巡回
の期限を閉合せり

同六日月三日晴。朝十時半カビテーイン及。此
地の全權并近郊山林を支配する官員來り郷導
して。兼て設るテユウルンといふ所より。敵を

観るふ陪せり。政獵場ハ國王の園にて。四方十町余ものへく幽静なる地にて。樹林茂密。禽獸蕃畜。四圍土塀ニ築立て其内ニ溪流を引て禽獸の來安き様ナリ。勢子とも二十人余四方より一時々逐立て禽獸の其小溝を廻り走るを要射する。鹿兔の類多く。此日の獲物ハ鹿五足兔六足なり。常ニ其園ニ畜置くる。鹿ハ七十五足類ハ數志らにといふ。勢子共の逐立方奔走敏捷なる。射者の馳騒詭遇。尤神速なり。此日午餐其山林ニ草茵ト。一大の食盤を設け。上下相集り同餐

モ野興宏濶頗る清味を覺ふ。夕六時帰る。此夜カビテイン其外郷導者等へ同案の夜餐を具し。馳駆の獵師へ佛貨三百フランクを賜ふ。

同七日西洋十曇。月四日。國王より再び謁見の事を申越さる。此地の乗馬を試んとて。調兵場へ至らる同八日西洋十晴。月五日。國王より郷導ひりて。都府外の調練場にて。陸軍三兵の火入調兵を觀るは陪せ。午前十時半。迎の馬車四馬ニ駕。一御者六人内。四人ハ駕小添二人ハ其馬ニ跨。外子導者一騎。の御者喝道せり。王宮の前達を左リニ折り。並樹

の大衢へ出。なを旋り十町余行て、郊外の調練場
に至る。調兵順序をなして陣列し、士官、樂手、歩兵
夫、礼式等なりて、先の陣列せし兵隊、各其長より
て指揮し、護送して場所を至る。兵隊ハ場中各所
に屯集し、夫より將帥指麾して、攻撃、嚴討、接戦の
運動なり。

此日の人數は、歩兵三大隊、大砲一座、騎兵三隊、
樂手隊共も、同勢二千五百人余云々。各隊連發
の時、砲声整齊、雷霆の如く、煙焰天日を蔽ひ、
甚壯烈なり。畢りて兵隊整頓の上、セ子ラール

ロナイル機敷ニ候。公使馬上にて、各隊の陣
列を巡視せらる。セ子ラールロナイル附従の
カビテインシボルト、其外人ぐ隨従せり、總
て兵隊捧銃奏賀の禮なり。

公使巡回ノ機敷ニ就き午後二時帰宿。
同九日西洋十月六日、夕六時、兼約の如く、王宮ニ請い、
國王同業の夜餐の饗なりとて、カビテンニケー
ス迎の馬車を備ふ、第一車ハ公使、赤傳従カビテ
インシイボルト、第二車第三車ハ傳副の人々な
り。王宮廻門より下乗なり、階梯を経て、相伴の貴

官陸軍總督其外役に出迎ひ。扣席よて暫時休憩せり。公使ハ王の燕席よ請し。附従の人々に次席よ扣へ。程なく。國王公使と共よ次の間よ至り。互よ紹介して。其貴官と傳副の士官とを引合せ。等しく打連て食盤の間へ移る。國王ハ中央。公使ハ右座よ就き。傳副の面く并貴官等。接伴ノ列せり。夜餐中ハ次席よて奏樂ゆり。割烹。調理善美を盡し。器皿杯盤燈燭。珠玉を鏤め。つゝ輝き華美を極めたり。夜八時半宴徹。樂闋り。又王の燕居よ請一カツフへ。及種々の名酒を飲ましむ。

同十時頃帰宿

同十日西洋十月七日雨。夕三時。字漏生在留のシャルジダフヘル來り。其國王太子當節國都よ在らざるよ付。巡回延引ゆらん事を談せり

同十一日西洋十月八日雨。朝七時半。マストリウツクレグーといへる。荷蘭國の豪家の招待せらるよ陪せ。陶器硝器等製造の場所其他種々。名苑奇亭等を見る。午夕とも饗應。尤鄭重なり。夜九時帰宿モ

同十二日西洋十月九日曇。朝九時。白耳義國を發。國王

マストリ
ウツク

の氣車にてカピティンニケイス同乗。氣車會所まで送り来る。夕五時佛都巴里へ歸館。

同十三日西洋十曇。夕七時白耳義都府より入く跡引纏め帰る。

同十四日西洋十月十日曇無事。

同十五日西洋十二日雨。午後一時入く博覽會を又

看る。陪セテ

同十六日西洋十三日曇。夜七時シルクデアンペラ

トワースといふ曲馬のかる場所といひソ一同

見物モ

同十七日西洋十四日曇。朝十時試砲を見る。陪モ
同十八日西洋十五日霧。無事。

同十九日西洋十六日晴。夕四時白耳義國在留中。附

彼のカピティンニケイズ来候を

同廿日西洋十七日曇。暮七時半伊太里國へ炭を從行并送行り入く。氣車場まで先駆を。此夜の車中よて徹一朝六時。アンベリウルといふ所にて。小憩せり

同廿一日西洋十八日雨。昨夜より異間を経過。新寒の添ふを覺ふ。朝来細雨。鐵軌の兩傍山輕聳へ

セナ
ン
ル
ミ

危石。怪松。突兀とて路畔に蟠る。氣車ハ其洞中を衝通し。溪流ハ鐵橋を架して通を行。路險峻なき。鐵道も亦至て堅牢なり。

此邊都て巖石多く。處々割截洞削にて。鐵道を作り。氣車を通也。其傍石炭など出を所あり。霜露早々墜ち木葉紅黃を齧。山骨青苔を見。い。瀑勢白綻を懸く。車中迅速の眺望といへとも。聊趣あり。

午後一時サンニセールへ抵り。是より山巔。峻嶮にて。いま、鐵軌氣車の設なき故。ジリジヤンス

といふ旅行馬車にて山頂を踰るまれ。日暮れを覺束なれば。此處は宿んとて家を見る。才アルテホストといふ一つの狭隘なる客舎のみ。漸く一行の膳を容さう。

サンニセールより伊太里國スーザまで。モンスニーの諸山連り長蛇のとく。両國の間を中断して。奚路険報。馬車の行程九十時間宿をべき所なくスーザよりチュランの氣車ハタ五時より其を定められ。此處は宿セーナ。第二時半。氣車場にて馬車を雇ひ。一車のみ

よて一行を容々、又足らざれば半へ其車のり
へり来るを待り。頃て客舎に至るふ。主人打驚き
より休みて出迎ひや、樓上に請ひぬ。各始て坐
よ就くいはゆも、陋陥不潔を究めたり。夫より又
馬車を雇ひて村落の風を看る。夕三時頃帰る地
ハ四圍山巒^{ハシマツ}へ興上よへ不敵戸^{ハシマツ}も亦旅况の寒
断雪^{ハシマツ}り眺望^{ハシマツ}見る所少^{ハシマツ}一
寥^{ハシマツ}を添^{ハシマツ}たり

同廿二日十九日 西洋十月晴朝六時ジリジヤンスと云。
馬車二輛を雇ひて發^{ハシマツ}也
此ジリジヤンスといふハ巴里^{ハシマツ}辺よて用ゆる。

オムニ、バスといふ車は同一く。其制長大よ
いて。尋常の馬車に異なり。一車は八人又八十
人を載せ。二階にして階上は荷物を容る。平坦
の地ハ二馬を駕^{ハシマツ}。險路^{ハシマツ}ハ六馬八馬。十二馬
を駕^{ハシマツ}。處くは會所^{ハシマツ}にて馬を取換へ。又ハ水
飼^{ハシマツ}など一て。疲勞を助く。頗る簡便なり。先年歐
洲^{ハシマツ}滌車^{ハシマツ}幾明の前ハ總て旅行は此馬車を用ひ
より。故今も僻鄉ハ故態を存^{ハシマツ}といふ
矣。路を曲折^{ハシマツ}。或ハ溪^{ハシマツ}傍ひて。朝八時一村^{ハシマツ}迄
抵^{ハシマツ}。村中滌車及鐵道を製^{ハシマツ}る器械^{ハシマツ}あり。是ハ佛

國商人の戮力。此陥路を開き。巖石の半腰を洞穿し。滌車を伊太里國まで達せしむと謀る也。とぞ。又馬車通行の路傍よへ別よ小さき鐵軌を作りてあり。是ハ米喇逕人の發起よて。後來の炎路ヨ沿ひて。小滌車を通セしめむとて為せるなりとぞ。山行愈深く一て道路益險なう。其危嵩絶壁石礎紫委もるよ至りてハ車を棄て徒行攀登にて絶巒よ達せれり。雲雷を亘下よ躡。星斗を頂上よ仰ん。中腹よへ屢々宿雪斑々とて頗る攀躋の渴を亟モアよ足る。嶺頭よ人家二三軒のみ。

馬を代らしめ。又ハ鐵軌工人の龍宿を所主といふ

サンミゼルヨリスウザよダ。馬車の焉を晉六次。其始ハ二匹四匹又ハ六匹中ハ八匹。燈路ヨハヨリテハ十二匹を駕キ。其艱險右より其嶺を下らむとき傍よ石柱あり。佛蘭西伊太里の境界なり。其より下りて漸々平夷なり。雲霧消えて。初て伊太里の諸山を望む。夕四時半ハザ滌車會所よ抵キバ。伊太里國のユロ子ールイ

シヤケエードボラヤニといふ者迎候せり。直モ
滌車モうつり。夜七時チユランへ着きホテルデ
ヨウロッパといふ客舎モ請け。郷導使もともく
来り。同所へ滞留セリ。めむとの王命を述ぶ。此夜
巴里ヘ電線を達セ

同廿三日西洋十月二十日曇。朝十時。ヨロ子ル來り。郷導
ノ。國王の別宮及。古代の戎器を貯ム所。說法所等
巡覽。午後一時帰る。

別宮の玄闕及石階とも。總てマルブルといふ。
白き石よての蠟石築立。最瑩潤光澤。宮殿

櫛角寺遙く金を鏤カ。巨大の油繪の額を掲げ。
戎器藏ハ。諸國より聚め得る。刀劍甲冑小銃
の類多リ。其中より御國の騎馬武者の像あり
。其甲冑の着用。馬具結束の仕方等。多く其
實を得也。

此地ハ當國の故都にて市街も廣く諸宮殿杯

ちいと羨慕あり

タ六時七分郷導とひよ。滌車モ同所を歛セリ
同廿四日西洋十月二十二日曇。朝八時伊太里都フロラン
スヘ抵り。カランドホテルデベエイといふ客舎

へ着（シテ）の但（シテ）氣章場まで。礼式掛（シテ）り
同廿五日西洋二十二日雨。朝九時ヨロ子ルル及礼式
掛來り。此地國王の別宮へ鄉導（シテ）りて。種々奇物
珍器油繪石細工等を見（シテ）よ陪せり。午後英國在
留公使來候（シテ）

同廿六日二十三日曇夜雨。朝八時附從のヨロ子
一ル及礼式掛（シテ）鄉導（シテ）て。議政堂。并石細工所モザ
細工石産（シテ）なり。見（シテ）よ陪せり。議政堂の中央よ
ハ。當代國王を真写せし油繪を掲げ其商公（シテ）ニハ。
先年伊太里國諸大戰爭の圖（シテ）とを多く掛並（シテ）ヘ。

會議の式（シテ）ハ。毎歲十一月より（シテ）但西洋四月迄。諸民
の惣代政府へ加（シタガウ）祖（シタガウ）の者。また其議は反（シテ）せしもの
を。左右又分ち。中央又ハ國王。并貴官まで一の國
論を出（シテ）。是を討論せしめ。其可なるを。折衷（シテ）する
といふ。但國論（シテ）は反せし者ハ左よ署（シタガウ）。又別又
高き機敷を設け。各國在留の公使を引て其議を
與（シテ）り聞（シテ）。且其面前の高き機敷より。此地の之
ハストル始。貴官の婦女出て是を聽聞（シテ）。其より
石細工所を看（シテ）。種々珍奇の細工あり
石細工ハ。此地第一の産（シテ）して。黒々硯材様の

石一種くの摸様を琢りしるものなり。其精巧尤細密にて亦優雅なり。其製造の品ハ食盤。小机。函。石板。及婦女子の胸挂の類多し。一の函石板を製作をるも五六月を経る其精密なるより至りてハ十年十五年の又一月を積て成功を竣かえるといふ。紫。碧。紅。白。黄。黒。其余間色の石を聚め人物鳥獸花卉草木其他種くの形を彫琢を。いつきも瑩滑スヤクカにて真マサニ又迫アツメシ

王謁見

同廿七日西洋二十四日晴。朝七時礼式掛來りて。國王

謁見の事を談に。同十時王車二輛を備て。公使を迎上。嘗て國情云々を告げ。蓋羅馬の諸式儀仗省略の事を請タリ。故は從者も稍減し。午後第一時事畢りて歸宿を。夕六時附從のコロ子ール來り謝し。王命を述て曰。今日公子并傳從の人々をして。烟波絶域スル臨ミ。比鄰親睦の好を結ひ給ふと全く御國の厚誼の遠きよ及ぶ所深く感戴よ堪へ。因ていさゝ其意を謝せん爲り。此地の貴重のデコラアシヨンスー贈スよ。尤傳從陪行の人々へ。其等級を以て贈り来る。暮七時半。附從コロ子ール禮式持ム者鄉導よて。剣を看る

一同陪せり。國王の接歎へ請ひ。謁見の時會せり。
第一等の礼式掛及陸軍總督等來り。さまく饗應
して。夜十一時帰館。

同廿八日 西洋十月二十五日 晴。夕三時。馬車にて郊外を看
る。アルノといふ。都府東北より出る川も添以て。
樹木繁茂。遊歩佳地なり。○當時意太里國よへ
故ゼ子ラールマリ。カルバルシ。ミヒムの。
羅馬廢滅。佛法掃除。各國門地闊闊の旧習を洗除
し。全歐洲をして。盡く共和政治さらしむるの説
を唱へ。此國政府貴官の者多く是を同意し。頻

り。國王よ逼り。其淵源深く。一て猶次第よ
汝蔓。己よ佛蘭西より羅馬へ。加勢の為め。人數
を繰出。意太里へ戦使を出。羅馬よ代り戦争
よ及んとせり。國王よへ素より。佛國よ。戦争の意
なタれハ。辞を構へて時機を延々。ガルバ
ルシ。一の奇計よて。國民愈々騒擾。舉て羅馬を
攻敵の勢を。其中よハ羅馬よ潛入して處々
侵掠よ及。一もカクテ。佛國よりも亦頗りよ兵を
送る間へ。自然和議破とな。一亂よ及。上づ
一と驟然。下づ

同廿九日西洋二十六日晴。午後一時半都府東庄の山
くを見る。よ陪モ。夜九時英國ミニストル書記官
来候モ。同時滌車モテ。別都ミランといふ所へ矣

也

十月朔日西洋十月二十七日晴。朝十時ミランへ抵る。即時
太子の傳ゼ子ラール來り。安着を賀す。
此ミランハ、意太里國一个の別都モテ。頗る富
饒の地なり。市街も廣く民戸も稠く。故ニ太子
別業と云。往々意太里王チユラーンの都をフロ
ランスより移セーグ。其地陥落なれハ。再び此地

同 よ移さんと欲せーう。其費用巨多を患て、未果
なうといふ。

客舎の前より山水を築き、諸人遊憩の地なり。
此遊憩場ハ市入夢酔ノ。今日ハ日曜なれば、此園
ヨ園都の兒女等群集セリ。午後三時公使遊覧の
為め。太子より馬車二輛粧麗なるを備ヘ。ゼ子ラ
ール卿導モテ市中慶々を見る。よ陪モ。兒女等蝶
集にて道路を遮る。卿導鳴鞭にて夕五時帰る。ゼ
子ラール等へ夜餐を具セ。太子の使者來り。明日
此地の因苑にて、共ヨ歟穢せんと請ふ。

同二日西洋十月二十八日雨天。午前十一時公使太子の居館を訪ふて。今日の畋獵を止めぬ。午時太子より公使の旅館に來り告別を。夜九時公使漁車にて此地を去り。フランスへ歸る。

同三日西洋十月二十九日晴。英國ミニストル来賀し。且マルマ島へ巡覽の事を。本國王より申越され、ヨーを述ふ。尤此地瀕境へ軍艦をよせ迎へんと約せり。

同四日西洋十月三十日晴。午後三時市中遊覽。陪モ

同五日西洋十月十一日晴。朝六時郷導來り漁車にて。

サといふ地の園苑にて。畋獵を見る。陪モ。途中都府有名の寺院梵刹を見る。中も丸き塔の高二十間余なる。最壯麗にて斜々聳立せる巖にして。微風よも堪さらむと疑ふ。くりよて實は奇製なり。夫より畋獵を観る。此日の獵。騎馬の勢子二十人許。四方より遙廻。一鏡手ハ。小さた松の枝にて作る小屋。潛みて其来るを要擊也。此時辰六足を得。夕四時畢り漁車にて夜七時帰る。騎馬勢子等其外夫へ賜物なり。

航西日記卷之五

1121587

